

竹内好と魯迅

Yoshimi TAKEUCHI et Lao She

佐々木 涇*

SASAKI Thoru

1 魯迅の年譜から

「阿Q正伝」の本質的な部分と魯迅の生涯を確認しておき、そして竹内好がそれらについてどのような部分に関心を持ち、どのようなことを考えたかをみていきたい。したがって、魯迅の生涯の重要な部分をみておく。日清戦争が終わった後1896年、明治29年の年に魯迅は父親を失っている。16歳の時である。母親は、官吏登用試験に何回も失敗した夫のかわりに、長男の魯迅に期待をかけたのである。それが1898年18歳の時の南京での学びである。成績優秀の結果、日本に派遣、留学となったのが1902年である。魯迅が1923年に発表した回想を見る。

しだいに私は、漢方医はけっきょく意識的あるいは無意識的な騙りにすぎない、ということを感じてきたのである。そして同時に、騙られた病人と、その家族にたいして深い同情をいだくようになった。さらにまた、翻訳された歴史書によって、日本の維新が大半、西洋医学に端を発しているという事実をも知ることになったのである。

これらの幼稚な知識のおかげで、のちに私の学籍は、日本のある田舎町の医学専門学校に置かれることになった。卒業して国に帰ったら、私の父のように誤られている病人の苦しみを救ってやろう。戦争の時は軍医を志願しよう。そしてかたわら、国民の

維新への信仰を促進させよう。(『呐喊』^{とつかん}「自序」、『世界文学大系62魯迅・茅盾』筑摩書房1958、5頁)

「私の父のように」とあるのは、1893年で父親が病んでいた時のことである。父親の薬のためにお金を使ったのであるが、このことを医者にだまされたとしたのが魯迅の認識である。これが医学への動機である。単に病人をなおすだけでなく、「国民の維新への信仰を促進させよう」という思いがある。「信仰」という気になる言葉が使われているが、考え方が啓蒙的であることは間違いない。その思いが、日本において学ぶべきことは「西洋医学」ということである。これはむしろのこと、江戸時代の蘭学、すなわちオランダ医学をシーボルトに学んだ人たちのことを知ったことによる魯迅の記述であろう。

そして1904年には、医者になることを志して、東北大学医学部の前身である仙台医学専門学校に入学し、解剖学の藤野先生と出会う。しかし、その医者になる考えが変わる。きっかけとなったのが次に引用するできごとだった。藤野先生にノートを見てもらっていたことから試験の問題が教えられていたのではないかと日本人学生達に疑われた事件のあとであった。

中国は弱国である。したがって中国人は当然、低能児である。点数が六十点以上あるのは自分の力で

*企業情報学部教授

はない。彼らがこう疑ったのは、無理なかったかもしれない。だが私は、つづいて中国人の銃殺を参観する運命にめぐりあった。第二学年では、細菌学の授業が加わり、細菌の形態は、すべて幻燈で見せることになっていた。一段落すんで、まだ放課の時間にならぬときは、時事の画片を映してみせた。むろん、日本がロシアと戦って勝っている場面ばかりであった。ところがひょっこり、中国人がそのなかにまじって現われた。ロシア軍のスパイを働いたかどで、日本軍に捕えられて銃殺される場面であった。取り囲んで見物している群集も中国人であり、教室のなかには、まだひとり、私もいた。「万歳！」彼らは、みな手を拍って歓声をあげた。この歓声は、いつも一枚映すたびにあがったものだったが、私にとっては、このときの歓声は、特別に耳を刺した。その後、中国へ帰ってから、銃殺をのんきに見物している人びとを見たが、彼らはきまって、酒に酔ったように喝采する——ああ、もはや言うべき言葉はない。だが、このとき、この場所において、私の考えは変わったのだ。（『藤野先生』『世界文学大系 62 魯迅・茅盾』筑摩書房1958、118頁）

中国人を日本人がどう見たかということではなく、殺される同胞を見せ物よろしく楽しんでいるかのように見ている同胞の姿にやりきれなさを覚えたのである。そしてそのスライドを見つめる日本人学生ばかりでなく、魯迅自身も見つめる群れの中にいることを認識している、といえよう。貧困から脱するために中国人の健康を維持するのに貢献しようとして医者になるつもりであったが、その自分を含めた人々の心を変えるのが先と考えて医者になることをやめて文筆業を生業としたわけである。これが魯迅をして文学の道に進ませることになった経緯であり、定説となっている。

2 『阿Q正伝』に関して

この魯迅が書いた小説『阿Q正伝』の主人公、阿Qが中国人一般をあらわしている、ということも定説となっている。この作品を魯迅が書いたのは1921年で41歳の時であった。ごく簡単なあらすじを言っておきたい。

阿Qは、農村社会の底辺に生きる日雇いで生きている。無知で間拔けで奴隷根性の持ち主のよ

うな人物である。村人は忙しいときに彼を思い出すだけで、姓はおろか名さえどういう字を書くのか誰も知らない。そして、どんな村人に対しても阿Qにとって絶対に敗北とはならない。というのも阿Qには「精神勝利法」があるからだ。村中からバカにされているが、それを感じることもなく、逆に村の連中のほうがバカだと思っている。村の旦那衆になぐられても、喧嘩に負けても、「今の世の中はさかさまだ、せがれが親をなぐりやがる」と思えば、彼の勝利は揺るがない。逆に自分より弱い者と見ればすぐに手出しをする。ところがこの阿Qに没落と悲劇が始まる。原因は女に言いよったこと、そしてそのため、地主に睨まれたことだ。やがて革命になる。革命は悪いものときめこんでいた阿Qも、ある日酔いにまかせて「革命だ」と叫んでみたら、村のおえら方があわてふためいたのを見てから「革命も悪くないぞ」と思いはじめる。ちなみに、この場合の「革命」とは孫文による辛亥革命のことである。しかし、それも束の間、おえら方は早速革命党に入党し、阿Qはたちまち「革命」から締め出される。ドサクサのなかで彼は役人の都合で略奪犯人に仕立てられてしまう。引き廻され刑場につくまで、まだばんやりしたことを考えていた彼だったが、その銃殺を見物に集まってきた村人たちの彼を見る目が、四年前に夜道で出会った狼の、鬼火のように光る「残忍でしかも臆病な」目と同じであったと思った。しかしながらもっと恐ろしい目であった。次に阿Qの最後の場面を引用する。

ところが、こんどというこんど、これまで見たこともない、もっと恐ろしい眼を、彼は見たのである。にぶい、それでいて、棘のある眼。とうに彼の言葉を噛み砕いてしまったくせに、さらに彼の皮肉以外のものまで噛み砕こうとするかのように、近づきもせず、遠のきもせず、いつまでも、彼のあとをつけてくるのだ。

それらの眼どもは、スーッと、ひとつに合わさったかと思うと、いきなり彼の魂に噛みついた。

「助けて……」

だが阿Qは、口に出しては言わなかった。彼は、とっくに眼がくらんで、耳の中でブーンという音が

して、全身こなごなに飛び散るような気がただけである。(『阿Q正伝』、『世界文学大系62魯迅・茅盾』筑摩書房1958、55頁)。

そして魯迅はこの作品の最後の部分に次のような文章を書いて終わりにする。

輿論はどうか、というとき、^{ウェイチョフン}未^{フン} 莊では、一人の異論もなく、当然、阿Qを悪いとした。銃殺に処せられたのは、その悪い証拠である。悪くなければ、銃殺などに処せられる道理がないではないか。いっぽう、城内の輿論は、あまりかんばしくなかった。彼らの多くは不満であった。銃殺は首斬りほどおもしろくない、というのだ。しかも、なんと間の抜けた死刑囚ではないか。あんなに長いあいだ引きまわされていながら、歌ひとつうたえないなんて、ついでにまわただけ歩き損だった、というのであった。(同)

もう一度言うと、阿Qは職もなく、金もなく、女性にも縁がなく、字も読めず、容姿も性格も最低という、およそ人間として最下層に位置する存在である。阿Qは「精神勝利法」と呼ばれる一種の癖を持っており、どんなに詰られようが、喧嘩で負けようが、結果を自分にとって都合の良いように取り替え、心の中で自分の勝利としていた。これが中国人一般というわけである。たとえば次のような文章があることを紹介する。中国文学史が書かれた一説である。

「阿Q正伝」が提起した問題は深く広い。おくれた中国社会で、中国近代文学は、たとえばジャン・クリストフのような積極的英雄人物を創り出すことはできなかった。だが、また同時期の日本文学のように狭い自我感情のなかに逃げこむこともしなかった。「阿Q」は西欧近代の思想と近代文学の方法による、いわばそのネガとしての暗黒社会の典型人物、英雄人物(?)と言えるのではあるまいか。そしてその阿Qの死は、彼を死なせたもの、すなわち「狼の目」に象徴されるいつも残酷な傍観者＝見物人ではない民衆、阿Qのような下積みの農民をとり残し犠牲にした辛亥「革命」の本質をあばき、中国革命の根本的な課題を深くえぐり出した(「阿Qが革命しなければ中国も革命しない」と魯迅は言ってい

る)。こうして「阿Q正伝」は、この時期の中国文学を代表する「国民文学」となったと同時に、「ドンキホーテ」などと同じ「世界文学」に通ずる普遍性を獲得し、東洋の近代文学を代表する作品となった。(前野直彬編『中国文学史』東京大学出版会、1975。284頁)

「ジャン・クリストフ」はフランスの作家ロマン・ロランが書いた作品である。ここで詳しくは触れないが、一人の音楽家を肯定的に描いた作品である。したがって読者は主人公のジャン・クリストフと一体になって、すなわち喜怒哀楽を共にして生きるということになる。では「同時期の日本文学のように狭い自我感情のなかに逃げこむ」とはどういうことか。『阿Q正伝』が書かれたのは、先ほども言ったように、1921年すなわち大正10年である。すでに明治の時代は終わっているわけであるし、大正デモクラシー、有島武郎や志賀直哉らの白樺文学運動の時代に入っている。そしてプロレタリア文学運動も盛んになってきた時代でもある。すなわち社会派的な文学作品は次第に増えつつある時代であった。「自我感情のなかに逃げこむ」とされる代表的な作品は夏目漱石の『こころ』であり、志賀直哉の『暗夜行路』であり、芥川龍之介の晩年の作品『或阿呆の一生』、島崎藤村がフランスへ行く前の作品『家』『春』、田山花袋の『蒲団』などである。

では「そのネガとしての暗黒社会の典型人物、英雄人物」とはどのようなことか。それは簡単である。すなわちロマン・ロランが書いたジャン・クリストフとは逆の人物を想定すればよいわけだ。つまり否定すべき人間であるということになる。

3 竹内好のとらえ方

では竹内好は『阿Q正伝』をどのようにとらえていたか。1948年つまり昭和23年、38歳の時に雑誌「世界小説」の9月号に掲載した『阿Q正伝』の世界性からそれを見ていきたい。

先ほども出てきたロマン・ロランが『阿Q正伝』を読んで感動したエピソードを紹介し、感心はしたが、自分は好きではないと告白している。

そのころ私はまだ魯迅がすきでなかった。魯迅のなかでも、ことに「阿Q正伝」はすきでなかった。

「阿Q正伝」は私にはむつかしすぎた。「阿Q正伝」のまわっている雰囲気が私はいやで、それが理解を妨げ、私は「阿Q正伝」と反対の側——「孤独者」や『野草』の側からばかり魯迅を理解しようとしていた。（『阿Q正伝』の世界性『竹内好全集第1巻』筑摩書房、1980。237頁）

ところが、竹内好はこの作品を翻訳しているうちに考えが変わってきた。その部分を少し長くなるが引用してみたい。

「阿Q」ほど弱点の多い人間は、近代文学のなかに珍しいだろう。どんなに思いきって自己曝露したつもりでも、これほどの悪徳を対象に盛ることはむつかしい。魯迅の苦しみの深さがよくわかる。「阿Q」というルンペン農民は、前近代的植民地社会の典型だといわれている。そのとおりだと思う。しかし、同時にそれは人間性一般に通ずる普遍的なもの——ドン・キホオテ的なものでもある。普遍にまで高められた特殊——真の特殊だ。「阿Q」にくらべれば「坊ちゃん」はまだ個別である。「阿Q正伝」は、作品としての完成の度が低い。ほとんど作品といえないくらいだ。作者もそれを自覚している。これは制作の事情にも関係することで、魯迅には最初は小説にする意図はなかった。発端のふざけ半分の書きぶりでも、それはわかる。だんだん引きこまれて、まじめになっていったらしい。そのような構成上の不統一や、そのほかにもいろいろ欠点がある。また、描写の誇張や、様式化など（これらは作者が意識して用いている手法であることが、のちにわかった）近代小説らしくない面がかなりある。それらが、ながいあいだ私に「阿Q正伝」をなじめなくさせていた。私は「阿Q正伝」が気になりながら、解釈できないでいた。ロマン・ロオランの甘さを、甘さだけで片づけていた。しかし私は、自分の誤解について思い知るときがあった。作品を自己完結的な作品だけとして量るのはまちがいで、それのおかれている時間空間上の幅と重みから見るべきであることをさとした。何よりも決定的に私の評価を変えた契機は、自分がこの作品を訳してみ、魯迅がどんなに深く「阿Q」を愛しているかを知ったことで

ある。「阿Q」が嘲罵され、殴られるときに痛むのは、魯迅の肉体である。魯迅によって、憎むものとして、打撃を与えるために、魯迅から取り出された「阿Q」が、魯迅によって愛されている。それはほとんど私には啓示であった。この短い（日本語で百枚くらい）破綻の多い、小説の体をなさぬ小説が、どんなロマンにくらべても見おとりしないということの意味がわかった。それがわかってみると、今まで作品の欠陥におもわれていた点まで、長所に見えるようになった。たとえば、この古めかしい英雄譚が、同時に心理的手法を取りいれているほど新しいのである。作品としての破綻は、欠陥であるよりは、作品を実人生に向って開放しているひろがりのように見える。百枚の「阿Q正伝」が千枚の『死せる魂』と等量の群像を包む大宇宙のように見えてくる。ロマン・ロオランがこの作品を認めたことが、私が想像するような甘さからではないことがわかった。たとい甘さであるにしても、その甘さは私などの手をつけられぬ甘さであることを私は理解するようになった。（同上、240～242頁）

竹内好は翻訳という作業の中で魯迅がもくろんだ作品を本当に理解したということになる。すなわち「自分がこの作品を訳してみ、魯迅がどんなに深く「阿Q」を愛しているかを知ったことである。「阿Q」が嘲罵され、殴られるときに痛むのは、魯迅の肉体である。魯迅によって、憎むものとして、打撃を与えるために、魯迅から取り出された「阿Q」が、魯迅によって愛されている。それはほとんど私には啓示であった。」この最後の部分に書かれた「ほとんど啓示」としているが、おそらくは「啓示」とみなしてよいだろう。つまり阿Qを魯迅が愛していること、欠点が長所であったこと、作品が破綻しているどころか「作品を実人生に向って開放しているひろがり」さえ見えてきたのである。総じて言うのならば、この作品には古めかしさなどはなく、さきほどの三件目の引用でみるように、近代的な小説によくみられる心理描写さえあったのである。

もう一点、竹内好の簡潔に『阿Q正伝』について書いたもの全文を紹介する。文章の中でもわかるが、「阿Q正伝」の芝居のパンフレットに書かれたものである。ちなみにこの芝居は1952年劇

団 NHK 芸術劇場旗揚げ公演の時のものである。

「阿Q正伝」は、だれがよんでもおもしろい小説である。ちょっと類がないくらいおもしろい。漱石の「坊ちゃん」がおもしろいといったって、「阿Q正伝」には及ばぬだろう。

それでいて、よめばよめほど、味が出てきて、汲みつくせぬものを感じられてくる。どこまでいっても、まだ奥がある。理解しおえる、ということがない。その意味では、これはむずかしい小説である。ユーモア小説とかコッケイ小説とよばれていい小説であって、しかも哲学的な深さをもった思想小説であり、階級分析の正確さをもった社会小説である。こういう二重の性格が「阿Q正伝」にはある。

辛亥革命という一つの歴史的な時代に、未荘という中国の一つの小さな村におこった事件をえがいているが、それがそのまま、あらゆる時代、あらゆる人類社会に通ずる普遍性へまで達している。阿Qという人物は、たしかに、ルンペン的な雇農を典型化したものだが、それがそのまま、人間性の深奥にふれて万人に共感をよびおこす。その共感の普遍性の点では「阿Q」は「オブローモフ」より上にある。どんな小説の主人公が下積みだといって、阿Qほど下積みの人間は、世界文学に例がない。人間のいちばんカスである。人類の中で、いちばん圧迫されている、これより下にさがれない人間である。その人間に高貴な人間性を発見したところにこの作品の不滅の芸術性がある。

憎むべき無智と悪徳の塊りである阿Qという主人公を、作者魯迅がどんなに深く愛しているかについては、作品中に証拠がある。たとえば、小説のなかで、飢えた阿Qが尼寺へ大根を盗みにいく途中の描写などである。いろいろの種類の食べ物屋が道ばたにならんでいるが、阿Qは見向きもしないのである。それがかれの求めるものでないことを阿Qは知っているのだ。これほど気高い魂があるだろうか。それほど気高い魂であればこそ、最後に銃殺されるようになって、かれを無智にとじこめていた一切の人類の目に、かれは狼の目を見ることができたのだ。

小説「阿Q正伝」は、一種の心理的倒錯法が用いてあって、読者ははじめ、自分が阿Qを眺めているつもりでいるが、いつの間にか、眺めている自分の

方が阿Qではないかという錯覚におちる。舞台の約束の中では、この効果は出ない。だから芝居を見た諸君は、ぜひ原作をよんでください。それから魯迅文学を一巡して、もう一度「阿Q正伝」に返ってください。それだけの骨を折っても、あなたの人生を考える上に損はないことを保証します。（『阿Q正伝』寸感『竹内好全集第1巻』筑摩書房、1980。277～278頁）

この引用の最後のほうにある「読者」あるいは「芝居を見ている人たち」への呼びかけに、「いつの間にか、眺めている自分の方が阿Qではないかという錯覚」という部分がある。それはまさしく、魯迅が仙台の医学校の教室で見たスライドに登場した処刑される中国人を見る「人たち」、その写真に写っている見物人だけでなく、魯迅を含めた教室にいる日本人学生たちの姿、それらの姿に阿Qが処刑されるのを見たがっている群衆の姿が重なってくる。処刑される阿Qが狼より怖いとする眼をもった群衆だ。もちろん過去においても阿Qはその群衆の一人であった。これは何も中国人に限らない。われわれ人間が持つものであり、餌のために襲いかかる本能的な動物の眼ではない。人間しか持ち得ない眼である。残酷さを見たい眼と言っていいたとしても。果たして理性で押さえることはできるだろうか。

竹内好が理解する『阿Q正伝』、そしてこれを書いた魯迅の意図をどのように読み取ったかが理解できたと思う。

4 『魯迅論』から

拙論「竹内好と魯迅、毛沢東」（長野大学紀要通巻第110号に掲載）において「魯迅論」を取り上げた。その論文は竹内好が26歳の時のものであり、1936年昭和11年10月に魯迅が亡くなった翌月に発表したものである。この論文では次のようなことが主張されている、と言ってよい。

攻撃的な論争を仕掛ける魯迅に注目して、彼の二つの作品「狂人日記」「阿Q正伝」を通して先駆的な作品であることを指摘した。その先駆性は社会の封建的要素を否定するものではある。ところが魯迅は、その指標となるものが西洋的な自由思想を取り入れたものではなく、個人主義的な色

彩はない。ということは、極めて東洋的な風習の上に立脚しており、およそ近代的意識とは縁が遠いと指摘した。これを竹内好は「十八世紀的遺臭」と言い、これでは時代を超えることはできないとした。一方先んじてはいるが、時代を超えることができないこと、それは魯迅の宿命的矛盾であり、当時の中国現代文学の矛盾でもあると指摘した。このことを十分に魯迅は理解しているからこそ、若者たちに「西欧の近代精神に触れること」を勧めていると、竹内好は報告している。

以上が前回、取り上げた「魯迅論」の主旨である。

4-1 魯迅の死を考えながら

さて、今回、取り上げる「魯迅論」は、今、話した「魯迅論」の発表の時、すなわち1936年から八年後の1944年（昭和19）12月、竹内好が34歳の時に出版されたものである。それ以後、竹内好が魯迅についてまとめて書いたものはない。魯迅について書いたとすればそれらは魯迅の小説に関する解説、あるいは現代中国文学の中での魯迅の位置などを解説するものであった。したがって魯迅をどのようにとらえたのか、ということであるから、この「魯迅論」について見ていきたい。

この作品が初めて出版されたのは、先ほども言ったように、1944年、すなわち戦争中に日本評論社から出されたものである。次が同じ出版社から1946年に出版された。この時は文中にある「支那」という言葉が「中国」に直されていた。三度目の出版は創元文庫版であって、1952年である。四度目の出版は、1961年で未来社からだった。五度目の出版は、竹内好が1977年67歳で亡くなった翌年の9月から出版されはじめた「竹内好全集」の第一巻に収録されたということになる。そして今手もとにある本は、四度目の未来社からの出版のものが新版と銘打って2002年に出版されたものである。そしてこの未来社版に書かれた「あとがき」が収録されているので、その一部を紹介したい。

魯迅研究書としては、この本はもはや役に立たぬくらい古びている。魯迅の全集は、旧版の全集よりもっと完璧なものが新中国になってから出版された

し、私がこの本のなかで注文した日記や書簡集も出版された。研究書にいたっては汗牛充棟である。材料の点だけでいっても、もうこの本の出る幕ではない。私自身も、その後にいくらか見解を深めているので、自分で読み返して顔を赤らめるようなところが間々ないではない。……略……、もしこの本の存在意味があるとすれば、歴史的文書として、あるいは作品としての意味だけであろう。その点を買ってくれる人がいるということは、著者としてはうれしくないことはない。私自身はこの拙い習作に今でも愛着を感じているのである。

そんなわけだから、今度は創元文庫版を、誤植を訂正しただけで、そっくりそのまま出すことにした。ただ自註は少し追加した。訳文に気のついた誤訳もあるが、訂正しなかった。（『[新版] 魯迅』未来社、2002、216～217頁）

竹内好が「拙い習作」と言いながら「今でも愛着を感じている」と書いているのをみれば、彼の自信のほどをうかがうことができる。聞くところによれば、現在でも中国人研究者はこの魯迅論を読むとのことである。すなわちこの魯迅論は、中国人以外の研究者による第一級の論文であるとみなすことができる。

さてこの論文の仕組みをまず紹介したい。

序章——死と生について／伝記に関する疑問／思想の形成／作品について／政治と文学／結語——啓蒙者魯迅

という具合にそれぞれ見出しがついている。

最初の章の「序章——死と生について」では二つの部分に分かれている。「一」の部分では「死」について書かれている。この章は重要と思われるので詳しく見たい。その冒頭の部分は、次のような文章となっている。

民国七年、三十八歳で「狂人日記」を発表してから、民国二十五年、「死せる魂」の訳稿を了えずに五十六歳で上海に没するまで、およそ十八年間、魯迅は中国文壇の中心的位置を一度も退いたことはなかった。しかし、人々が彼を文壇の中心としてはつきり承認したのは、彼の死後である。（同、7頁）

もう理解できると思うが、この部分は問題提起

をしている。まず竹内好が指摘するのは、当時の中国において魯迅の存在が中心的であった、という認識が人々にはなかったことである。そして続く文章で魯迅を「疎外する」人が多かったことを指摘し、「少数派」であったことを書き記している。このことは逆に、魯迅が「頑強に自己を守った」という姿勢を保持したことを竹内好は強調していることになる。この厳しい対立が、魯迅の死によってなくなり、文壇が統一されたと指摘している。その証拠に翌月の各文学雑誌は魯迅を追悼する特集を組んだことを竹内好は報告している。

前回の拙論で竹内好が魯迅の攻撃的な論調を展開したことを紹介した。やはりこの論文でも同じように魯迅の攻撃性を書いている。

論争は、魯迅の文学が自己を支える糧であった。十八年の歳月を論争に費した作家は、中国でも珍しいことである。病的という批評が傍観者から生れるのは不思議でない。学匪、墮落文人、偽善者、反動分子、封建遺物、毒舌家、変節者、ドン・キホーテ、雑文屋、買辦、虚無主義者、これらの、専ら魯迅をきめつけるために案出された嘲罵の数々は、彼の用いた筆名にも劣らぬその多彩さによって、論争の激しさと性質を暗示している。彼は、旧時代を攻撃しただけでなく、新時代をも恕さなかったのである。嘲罵の多くは、彼の愛した同時代以後の青年から受けている。それに対して彼は、身を退くことを知らない。人間としての性質の善良さについては衆評が一致しているから、この論争は、彼の文学の側から説明されねばならぬ。彼は論争を通じて、何物かを得ていったのである。あるいは、何物かを棄てていったのである。窮極の静謐さを求めずして出来る業ではない。論争は魯迅にとって「生涯の道の草」であつたろう。(同、8頁)

論争とは互いに自分の言いたいことを確固とした根拠に基づいて論理を展開し、相手の主張を論駁し、相手を説得、もしくは納得させることである。この過程において大事なことは、互いに相手の言葉をよく聞き、それぞれが相手の論理、主張の中にある矛盾をとらえることである。その上で、自分の主張を展開する。これが望ましい論争である。ということであれば、この場合、魯迅の

論争相手である若者たちは、魯迅の言うことを深く認識したに違いない。すなわち若者たちは、論争の課程で、魯迅から何ものかを学んでいたのであり、そのことに気づかなかったのである。そして竹内好は指摘する。

「私は牛のようなものだ。食うのは草で、搾り出すのは乳と血だ。」乳と血を搾り取ったのは青年たちである。彼らはただ、身近すぎて牛を忘れていた。牛が身を横えて動かなくなったとき、愕然として牛を意識した。今まで魯迅の名で呼んでいたものが、実は彼ら自身であることに気がついた。魯迅にとって、死は彼の文学の完成である。しかし青年たちは、はじめて自己の孤独を知った。(同)

この引用にある「魯迅の名」とは前に引用した文中にある「学匪、墮落文人、偽善者、反動分子…」など、ののしる呼び方である。だから先ほどの竹内好の指摘、すなわち対立がなくなり文壇が統一されたと云うことである。これが魯迅の死によってもたらされたことである。であるから「死は彼の文学の完成である」という文章は、魯迅が死ぬことによって文学を志す青年たちが魯迅が主張する意味を知ったこと、すなわち魯迅が当時の中国の文壇に示した文学者の態度、そして文学の有り様を示したことが理解されたのである。別な言い方をするなら、先ほどの阿Qの部分で見た人間の持つ「眼」を何とかしたいとする姿勢であり、そこから生み出された作品を作ることである。それを竹内好は魯迅のもくろんだ「文学」が完成したと断言したのである。当然のことながら政治に振り回される「文学」は否定されるのだ。ここに至って魯迅は論争をしたのである。では、魯迅自身が死そのものをどのようにとらえていたか。竹内好のしている部分を引用してみる。

魯迅の死は病死である。病名は、須藤医師の証言によれば、胃拡張、腸弛緩、肺結核、右胸湿性肋膜炎、気管支性喘息、心臓性喘息、および肺炎である。長年の文筆生活が、肉体を蝕んだことは、ほぼ確実であろう。彼は病中に、転地や絶対安静の勧告を謝絶している。何もしないで一月で治るものなら、二月かかってもいいから仕事をさせてくれ、半

ば戯れに主治医にそう語っている。その理由は、過去にそのような習慣がないからである。読書や執筆を禁ぜられることは、病気よりも苦痛であった。事実、彼は死の二日前まで筆を執った。文学者の覚悟として、立派である。しかし当然と云えば、当然である。そのことだけで彼の死を悲壮に見るのは、稚愚であろう。だがそれにも拘わらず、私は彼の死に、ある改った行為の意味を感じる。彼の臨終は極めて平凡であるが、その平凡さが私には悲痛に見える。死は、彼の目撃したものではなかったかもしれぬが、やはり運命のようなものは、あったと考えるべきではなからうか。私の想像は、もし誇張した言葉で云うことを許されるならば、晩年において鲁迅は死を超えていた。あるいは死と遊んでいた。彼が死を決意した時機は、前にあったのである。形骸を始末することだけが残されていた。そうでなければ、人々は何故、彼の死をあのように慟哭したのであるか。(同、10頁)

鲁迅には死は恐怖ではなかった、と言えよう。「彼が死を決意した時機は、前にあった」とあるのは、竹内好が作成した年譜（筑摩書房刊「世界文学体系第62巻」1958）の1933年のところを見ると、「暗殺された楊銓の葬式に、危険をかえりみず参加、家の鍵を携えなかったといわれる」とあるが、このときのことである。それにしても驚くほどの数の病名が列挙されたことからみれば、鲁迅自身は身体に至る所に不調があったことを知っていただろう。そしてそれは「死」を意識していたということになる。

続いてこの論文の論旨は思想家としての鲁迅ではなく、文学者としての鲁迅を考えていることを示している。その鲁迅について「私は、鲁迅の文学をある本源적인自覚、適当な言葉を欠くが強いと言えば、宗教的な罪の意識に近いものの上に置こうとする立場に立っている。鲁迅にはたしかに、そのような止みがたいものがあったことを私は感ずる」という認識を示して、それが「ある何者かに対する贖罪の気持ち」と一応は書いた。「何者」かは、鲁迅自身も明確には解っていなかっただろうと竹内好は指摘し、中国語の「鬼」のようなものかもしれないとも書いている。このことは散文詩集『野草』を論拠として取り上げて

いる。そしてこれに続く文章を次に引用する。

鲁迅は、普通に云う意味での思想家ではない。彼の根本思想は、人は生きねばならぬ、ということである。それを李長之は直ちに進化論的思想と同一視しているが、私は、鲁迅の生物学的自然主義哲学の底に、更に素僕な荒々しい本能的なものを考える。人は生きねばならぬ。鲁迅はそれを概念として考えたのではない。文学者として、殉教者的に生きたのである。その生きる過程のある時機において、生きねばならぬことのゆえに、人は死なねばならぬと彼は考えた私は想像するのである。それは、いわば文学的な正覚であって、宗教的な諦念ではないが、そこへ到るパトスの現れ方は宗教的である。つまり説明されていないのである。(同、12頁)

人はなぜ生きるか、ということ論理的に考えることは哲学的な問いである、と言えよう。鲁迅はこれをしなかった、と言うのが竹内好の認識である。では、宗教的にとらえると言うことはどういうことか。この引用文でのキーワードは「パトス」である。「パトス pathos」とは、ギリシア語であり、哲学用語である。その意味は、「受動・受難」を意味する。事件や他人により人は受難としての情感・激情を内部に持つことになり、それはエートスのように恒常的ではない代りに、一瞬のうちに何かを生み出す契機となる、ということだ。そしてパトスの反対語はエートスである。この「エートス」ということばは、「人間が行為の反復によって獲得する持続的な性格・習性」という意味である。であるから「パトス」は、転じて、「突発的な情熱」という意味にもなっている。したがって、ここでの「生きねばならぬ」は説明不可能ということだ。生きるということに説明はいらぬ。本能的なものであり、しかも「素僕な荒々し」と竹内好は付け加えている。つまり、「生きねばならぬ」という思いは、考えた末にとらえたのではなく、執着とでもいえるような状況の中に保たれたということだ。

竹内好は、この序章の一の部分でこのように鲁迅の死を通じて「生きねばならぬ」という考え方と中国文壇のありようを示した。

4-2 魯迅の心の底——混沌

次の二の部分の初めでは、魯迅の文壇生活の18年間について中国近代文学の全歴史であると竹内好は書き始めている。そしてこの近代文学史は三つの時期、「文学革命」「革命文学」「民族主義運動」があると定義している。これらのいずれの時期も魯迅は生きぬいている。そしてどの時期においても様々な見解と論争し「悪戦苦闘」したのが魯迅であると竹内好は位置付けている。そして強調するのは、魯迅が「文学の政治主義的偏向から文学の純粹さを守った」という点である。ただし、新時代に対して方向を示すような先覚者ではないと、断言している。そして次のように書きしるす。

彼には思想の進歩というものがない。彼は最初、進化論的宇宙観の信奉者として登場したが、後には進化論の誤謬を悟ったと告白している。また、初期の作品に見られる虚無的傾向を、晩年には悔いている。それらは、人によって魯迅の思想の進歩の如く説かれているが、彼の頑強な自我固執に対しては、思想の進歩と云うべくあまりに二義的なものである。現実世界での彼の強靱な戦闘的生活は、思想家としての魯迅の面からは説明されぬ。思想家としての魯迅は、常に時代から半歩後れている。では、それは何から説明さるべきか。彼を激烈な戦闘生活に駆ったものは、彼の内心に存する本質的な矛盾であったと私は考える。(同、16頁)

この引用文にある「戦闘的生活」はもちろんこれまで見てきた魯迅の論争に明け暮れた生活をさす。思想家としての魯迅が半歩遅れている、ということは、論争が明快な根拠に基づいて行われるならばこのようには言えることはできず、魯迅自身の内部において明快さが保ちえない状態であるということだ。このことを竹内好は「本質的な矛盾」といい、さらに「文学者魯迅は一の混沌である」とさえ言う。そしてその混沌は自覚されていないが、そこから生じる「苦痛」はわかっていた、と竹内好は指摘する。その根拠として四点の文章を引用している。

「私の作品を偏愛する読者は、よく私の文字が本

当のことを書いていると批評する。しかし、それは褒めすぎである。原因は偏愛のためだ。無論私は、そう人を騙そうと思っているわけではない。だが心に思う通り云い尽した覚えは一度もない。」(『墳』の後に記す)

「私が筆にまかせて心にあることをそのまま書いていると思う人があるが、実はそうとは限らぬので、私の気兼ねしていることは決して少なくないのである。……私がいささかの気兼ねもなく物を云う日は、あるいは来ないかもしれぬ。」(同)

「私の云うことは、いつも考えていることと違います。何故そうなるかと云うと、『呐喊』の序文で書いたように、自分の思想を人に伝えたくないからです。何故伝えたくないかと云うと、私の思想は暗すぎ、自分でも正確かどうかははっきりしないからです。」(許広平あての手紙「両地書」第一集二十四)

「悲しいことに我々は相互に忘れることは出来ない。而して自分は愈々人をだますことを盛んにやりだした。そのだます学問を卒業しなければ、或はさなければ円満なる文章は書けないのであろう。」(「私は人をだましたい」原日本語)(同、17~18頁)

引用文中の波線の部分は論者がつけたものである。竹内好が引用したこの四つの文章を分析してみると、魯迅が必ずしも本心を書いているとは言えない、という証拠になりそうであるがそうではない。一つ目の引用文は、だまそうとしているわけではないが、本心を言いつくすことはできなかった。二つ目は気兼ねして書いてはいた。しかし気兼ねせずに書けるような日は来ないかもしれない。三番目は、自分の思想を伝えたくない、その理由は自分の思想が暗くて正確かどうかははっきりしない。最後はだますことを意図的に行ったが、それをやり尽くさなければ円満な文章を書けない。せんに詰めればそのようなことになる。このようなことを書いたのは、魯迅が論争に明け暮れたからであろうし、事実であろう。そしてこのような考え方で書いていた理由は、論争的に身構えることではなく、気兼ねせずに円満な文章を書

きたかったという願望の表れであるまいか。そしてその心の底には竹内好が言う矛盾あるいは混沌が心の底に渦巻いていたからということになるだろう。その混沌あるいは矛盾を明快にかつ明らかにするために論争をした。すなわちだますようなことを試みたといえる。そのように書き続ける限り、矛盾はなくならず、論争は続くということになる。

この魯迅を竹内好は「ただ虚言を吐くことによって、一の真実を守った」と言い、「文学は無用である」と考えていることが魯迅の根本の文学観と断言する。この場合の真実とは、魯迅の本質すなわち矛盾もしくは混沌状態のことである。このようなことに基づくのが「文学」であるとすれば、まさしく「無用」そのものである。このような魯迅が書いた小説を竹内好は「まずい」といい、作品に「コスモス」がないとして『阿Q正伝』にもその欠陥があると書いている。この場合の「コスモス」は、調和と秩序のある世界または宇宙、ということになる。平たく言うならば「まとまりがない」ということになるであろう。魯迅が最初に遊びのような気持ちで書き始めたという取り組み方にもよることで明らかだ。魯迅の作家的才能は、小説家ではなくむしろ文学史研究の方が優れていると竹内好はみなしている。

彼は一方では、新しい文学理論の翻訳を数多く出しているが、抽象的思惟は終生彼と縁がなかった。現れとしての魯迅は、あくまで混沌である。

その混沌は、中心的に一つの像をその中から浮び上らせる。それは、啓蒙者魯迅と、小児に近い純粹の文学を信じた魯迅の二律背反的な同時存在としての一つの矛盾的統一である。私は、それを彼の本質と見る。自己を許容しないばかりでなく他人をも許容しない激しい彼の現実生活は、一方の極に絶対静止の希求を置かなければ理解しがたいように、近代中国の秀れた啓蒙者は、自己の影として信じがたい

ほど素樸な心を抱いていたと考えたいのである。啓蒙者と文学者と、この二者は、恐らく魯迅にも気付かれずに、不調和のままにお互を傷けあわなかった。それは彼が、周作人や胡適ほども思想家ではなかったからであろう。しかし、ともかくこの魯迅の矛盾は、魯迅に表現された意味で、現代中国文学の矛盾でもあった。何故ならば、彼は論争を通じて中国文学から自己を選び出していったが、そのことによって彼自身が中国の近代文学の伝統となったからである。(同、19頁)

一般に文学者といえば、作家たちが書いた小説や詩などを研究する、すなわち作品を分析して成立事情や時代背景などの関係を考慮して、その作品の価値を見極めることをする人である。啓蒙者とは、教え導く人のことを指す、すなわち先達である。文学とは、言葉を用いて人間の内面とそれを取り囲む外の世界を表現することである。その描き出された世界が、秩序、あるいは調和ある世界として整っていれば、そして人間の普遍的なものが表現されていれば文学作品となる。上の引用文にあらわれた理解しにくい言葉をこのように定義すれば、竹内好の了解している魯迅の姿が明確になってくる。

古い体質の世界を破壊するには啓蒙者でなければならない。啓蒙者であるためには理想を明快に示さなければならない。しかしそれを明示できない魯迅は思想家ではない。一方、文学は現実の世界に生きる人間たちを心の中までも明らかにするのに言葉を用いて描き出す。魯迅が描き出した社会は、古い体質の世界とそれを引きずっている人間たちの社会である。しかしながら魯迅にとって十分それを描き出すことができなかった。そのジレンマ状態が、竹内好の言う「矛盾」であり「混沌」である。その混沌を論争もしくは小説、随筆などで描き出した魯迅を「詩人」とみなしたのである。